

教育のオンライン化と大学図書館

竹内 比呂也
(千葉大学)

教育のオンライン化（オープン化）が もたらしたものは何か？

- 「何を学ぶか」を決めるのは誰か
 - 学習資源としてのMOOCsなどの出現は、教育提供者側が何を教え、身につけさせたいかということよりも**学習者の興味関心に基づく学習**を支援する
 - もちろん、一定のカリキュラム枠組みに基づく必修・選択必修などの卒業要件を満たそうとするためには学習者の興味関心だけではダメ。
 - **生涯何かを学び続ける**ということを保証する環境としてのオープン化は極めて重要である

教育のオンライン化(オープン化)が もたらしたものは何か？

- 教育・学習スタイルの変化
 - 「単位の実質化」: 「教室での授業」+ 「事前・事後学習」→ 「反転教室」→ 授業の相対化
 - 学習の場としては教室は最適ではなくなる
 - 教室には必要な学習リソースがない
 - アクティブラーニングのための空間として
 - 学習支援を得られるか？
 - コンテンツを得られるか？
 - 教育の場としてはどうか
 - ではどこが？ → **大学図書館**

大学図書館を巡る環境の変化

- 大学図書館が高等教育に関する政策的議論の一部に
 - 1970年代以降の大学図書館に関する政策的議論は「研究」に関わることに終始
 - 2010年以降、急激に「学習」に転換
 - 「大学図書館の整備について(審議のまとめ)ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー」(科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会, 平成22年12月)
 - 「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ)」(科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会, 平成25年8月)

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯 学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」

中央教育審議会答申(2012年8月28日)

4. 求められる学士課程教育の質的転換 (学士課程教育の質的転換)

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、**学生の主体的な学修**を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

「学修環境充実のための学術情報基盤の整備 について」(2013, 審議まとめ)

- 学修環境充実に関わる学術情報基盤整備については、主に1)コンテンツ, 2)学習空間, 3)人的支援の3つの要素に整理することができ、それらの有機的な連携が重要
- 教員の意識の改革, 基盤確立のための運営体制の強化, 教育内容の標準化と効果の分析の必要性について言及
- リアル, バーチャルの両面での環境整備
- ニーズや特性等の状況に応じて, ユニークで効果的なアクティブ・ラーニングのための基盤整備を展開すべき

大学図書館を巡る動向

- ラーニングコモンズ

- 学生の主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化の一環として、「アクティブ・ラーニング・スペース」を整備する図書館数が平成25年5月1日現在で306館となり、前年(226館)より35%増加。

(文部科学省「平成 25 年度『学術情報基盤実態調査』の結果報告」より)

ラーニング・コモンズとは

- ラーニング・コモンズとは、学生を主体とする、物理的な、あるいはヴァーチャルな学習空間であり、開放的であること、柔軟性があること、快適であること、知的刺激があること、実用的であること、といった原則に則って設計されるものである。ラーニング・コモンズは学習過程に関与する学生、教員を支援するための技術、資源、サービスを提供することによって、共同あるいは個人のアクティブ・ラーニングを促す。ラーニング・コモンズを通じて、図書館は、キャンパス全体の目的、目標を具現化する他の学内部署との活発な連携を構築しようと努力するつもりである。(University of Northern Iowa, Rod LibraryによるLCに関するミッション・ステートメント)
- The Learning Commons is a student-centered physical and virtual learning space designed under the guiding principles of openness, flexibility, comfort, inspiration, and practicality. It fosters collaborative and independent active learning by providing technology, resources, and services that help to engage students and faculty in the learning process. Through the Learning Commons the library will strive to create active partnerships with other university units that incorporate campus-wide goals and objectives.

対面型講義

授業の
コンテンツ化

教員

教科書、
教材、
参考資料

動画教
材、授
業映像

電子
ジャー
ナル・e-
books

職員

学習



コンテンツ

誰でも
使える
Web上
の資源

TA・SA

場所としての図書館

印刷資
料

機関リ
ポジ
リ

ゼミナール

学内外で生産
される研究成果

学生を中心に見た「場所としての図書館」と機能

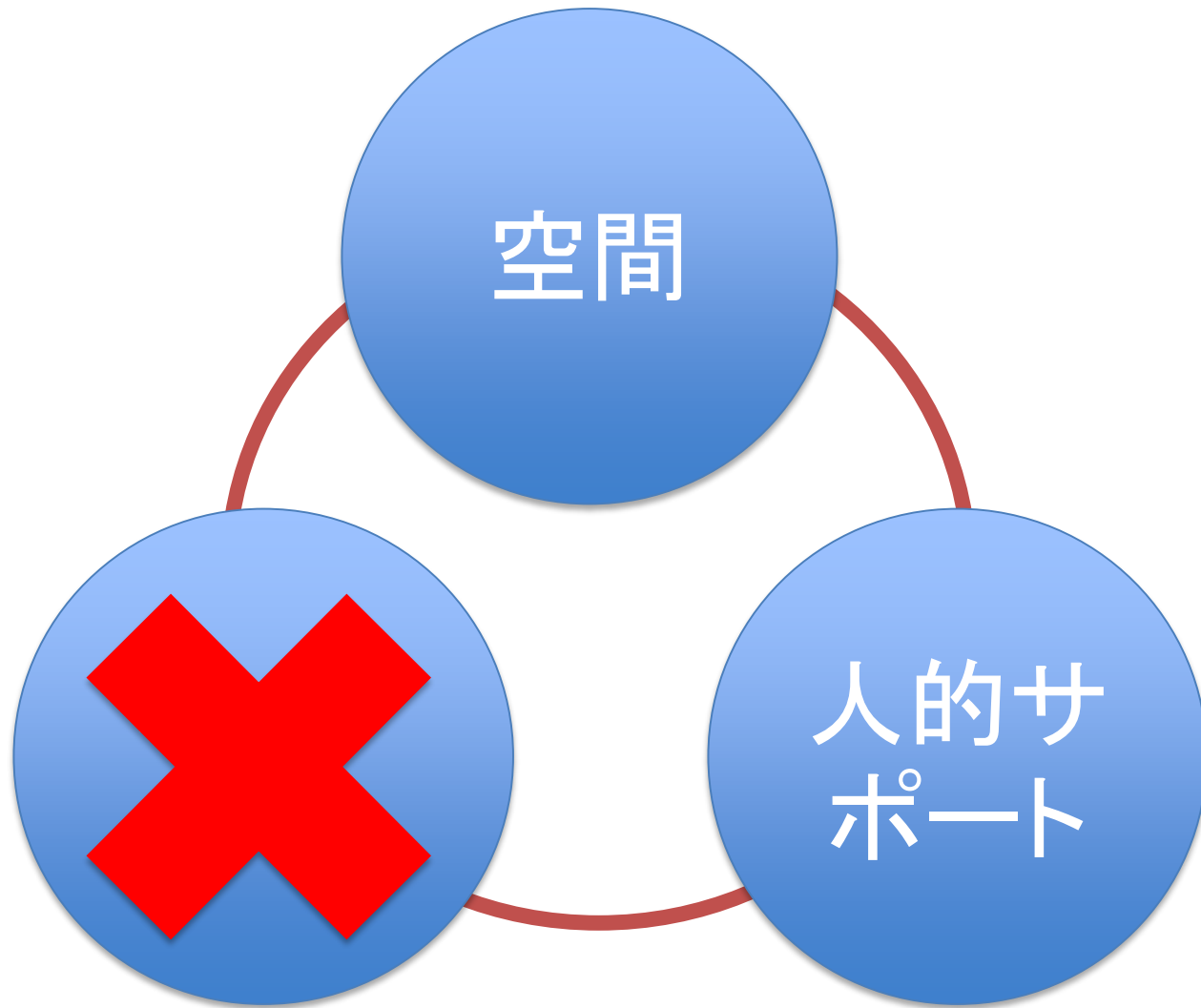
コンテンツの提供の基本的考え方

(千葉大学アカデミック・リンク)

- 学生が利用したいときに、電子媒体でも印刷媒体でも迅速に入手できるようにする。図書館蔵書にこだわらず、購入も一つの選択肢として考える。教材の作成支援も視野に入れる。
- コンテンツとして以下のようなものを想定
 - 1) 公刊された出版物に代表される著作物
 - 2) 著作物の一部(あるいは全部)を再パッケージ化した教材(コースパック)
 - 3) 授業録画(授業中に提示される著作物がその中に含まれる)
 - 4) 著作物の一部を利用して、教員が独自に作成した教材
 - 5) 完全にオリジナル作成された教材

千葉大学における成果

- 共同研究部門(DNP, 丸善)の設置により, 教材作成支援を具体化
 - 『児童文学事典』の電子的再生
 - LMSに対応した物理学共通問題集の作成
 - PODを用いた教材作成実験(複数の著作物からいくつかの章を抜き出してコースパック化)
 - LMSに対応した「章売り」
 - いくつかの授業で特色ある教材の作成
 - 著作物の電子的配信を可能にするための著作権処理
- 授業に関する動画の配信
 - 授業そのもの
 - 授業を紹介するもの



過去に起きたこと

@bonotake @pi8027 『圏論の基礎』が品切れなのは私も困っていますが、再刷の判断は完全に出版社が行っているので、むしろツイッターで@SpringerJapan に増刷希望を送って頂くほうが効果的ではないかと思えます。このツイートは拡散して頂いて構いません。

<<http://twitter.com/#!/metaphusika/status/95266086341181440>>

の 카테고리を見る

検索

本

詳細検索

ジャンル一覧

新刊・予約

Ama

クリック **なか見!** 検索



圏論の基礎 [単行本]

S.マックレーン (著), 三好博之 (翻訳), 高木理 (翻訳)

★★★★★ (1 カスタマーレビュー) いいね (0)

この本は現在お取り扱いできません。 [在庫状況](#)について



310,000人以上の著者を網羅!

著者の作品一覧や、著者写真・略歴など、著者に関する情報は、[「著者セントラル」](#)へ。

[› その他の情報を見る](#)

[自分のイメージを掲載する](#)

[この本の中身を閲覧する](#)

今日, このような状況は解消された...?

コンテンツ供給の重要性

★教育・学修に必要なコンテンツが供給され続けることが大事

- 教育・学修に使いやすい形で
- 学習者，教育者のニーズがちゃんと供給者に伝わる形で
- 電子情報環境下において関係者が納得できるような合理性のある価格モデルで

出版社，著者，大学の連携によって実現すべき変革

- 多様なフォーマットでのコンテンツの提供
 - Print-on-demandの可能性・有用性は高い→実現
 - 図書館の中に書店を！→実現
- 教育，学習における利用障壁の除去 →まだ
 - 単なる電子化ではなく，E-learningなどでの利用を！
- 合理性のあるビジネスモデルの構築 →まだ
 - 「包括的」「ライセンスング」という考え方を！
- 「ディスカバリー・ツール」の必要性 →実現
 - 「何があるか」+「入手手段」の提示
 - ディープウェブも，有料コンテンツも，紙も電子も。学習，研究に必要なコンテンツであれば何でも一元的に検索できる。

教員の認識

図書館の現行のシステムが、学生の利用環境と一致していないのではないかとと思われる。例えばビデオであればyoutubeなどは見るだろうが、大学では見ないのではないだろうか。また、文献も図書としてではなく、PDFなどでダウンロードして、ケイタイやパソコンで見るとはないかだろうか。

教材に関して何が課題か？

- 「権利制限」を明らかに超える利用実態
- 許諾を得ようとする大変な手間と労力 > 非現実的
- 結果的に、不安を抱きつつも「えいや」とやっ
てしまうか、使うのをやめる
- 大学のコンプライアンスという観点では問題

大学学習資源コンソーシアム(CLR)

- 名称: 大学学習資源コンソーシアム(CLR)
- 発足: 2014年5月1日
- 参加大学: 北海道大学, 東北大学, 筑波大学,
千葉大学, 東京大学, 名古屋大学,
京都大学, 九州大学, 慶應義塾大学
- 運営委員長: 竹内比呂也(千葉大学)
- 運営委員: 吉見俊哉氏(東京大学)ほか
- アドバイザリー・コミッティー: 学術出版社, 学術
情報政策関係者, 有識者

CLRの目的・役割・運営原則

- 目的: 学術研究成果を大学における教育に活用するための(大学側の)基盤を整備する
- 役割: 出版等によって利用可能となった学術研究成果を教育担当者が「自由に」使える環境を構築、支援する
- 運営原則:
 - 日本における高等教育の向上を目的として、
 - 関係する利害関係者間の信頼関係に基づき、
 - 透明で、ニーズを反映した運営を行なう。

高等教育における学習資源の開発と利用の 革新的モデルを構築する。

